

編 集 後 記

アジア連帯委員会
事務局長 山崎 高明

ラオスの首都ビエンチャン・ワットタイ空港、コンベアに乗って流れてきた僕のスーツケースの車輪1つが見事に根こそぎ無くなっていました。こんな珍事で幕を開けましたが、有意義な7泊8日の視察となりました。総勢10名のたかましいメンバー、快くご派遣をいただいた組織、そして、熱心に対応いただいたコーディネーターのチャオさんとヌーソンさんにこの場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。

CSA事務局長を拝命してから1年3カ月の間に、ラオスは4回訪れたこととなります。空港での乗り継ぎにも慣れ、現地での道案内も多少は頭に入り、ラオ語の挨拶も自然と出てくるなどラオス通を気取っておりますが、訪れるたびに、新たな発見があり課題を土産に持ち帰ることになります。昨年まで約20年にわたりお世話になったコーディネーターのフンペンさんが勇退され、新しいコーディネーターを迎えました。フットワークも軽く、メンバーともすぐに打ち解けてくれたおかげで、私もたいへん心強かったです。今後もスタディ・ツアーに限らず、若い2人のコーディネーターにCSAとラオスの懸け橋になるよう人間関係を築いていきます。

「ラオス国民は依存度が高い」ラオス大使館における意見交換のときの中野公使からの発言です。確かに、これまでの訪問時にお会いした方たちの言動を振り返ると思い当たる節もあります。そして、参加者の中にも課題視された様子が訪問記録や感想文から読み取れます。CSAは活動方針の中で、サンティパープ高校寮への支援について『運営支援を継続する一方で、段階的・計画的に自主運営を進める』と謳っています。具体的に何をやるのかは今のところ模索中ですが、公使の発言は、今後、支援をしていくうえでの大きなヒントになると考えます。

首都ビエンチャンを後に、後半は世界遺産の街ルアンパバーン、そして、交通渋滞が異常なタイへ。ここで訪れたJILAFバンコク事務所では、関口所長から「小学校点検などのお手伝いはできます」という嬉しい土産をいただきました。これまで以上に連携を強化し、定期的に情報共有をしていくことがCSAの活性化につながるものと確信しております。

今視察のスケジュールを組むにあたっては、公式訪問日と移動日を明確に分けることに重点を



置きましたが、体調管理がしやすく、メリハリも付いたなど参加者からも一定の評価を得られました。一方で、準備不足を感じる案件もありますので、次回以降に活かしていきたいと思えます。1月27日早朝、杉山団長以下10名の視察団は無事に羽田空港に到着、このご縁を大切に、そして、地域・職場でCSAの活動を広めていくことをお互い確認し解団となりました。メンバーのご奮闘を芝公園より祈念しています。